

式亭三馬『浮世風呂』における 敬語と経済的背景

小 川 栄 一

1. コミュニケーションの観点からの敬語史研究

筆者は、日本語の歴史をコミュニケーションの観点から捉え、その変化過程の究明をめざしている^{*1}。その具体的な方法として、情報伝達に伴う人間の心理的な交流や、社会的な背景を視野に入れつつ、談話分析の手法によって言語行為の変化を探究するものである。従来の日本語史研究は構造面からの究明が主であって、コミュニケーションの観点からの探究は充分とはいえない。その時代的な変化と原因、社会的背景との関連について具体的な問題を取り上げて明らかにしていきたい。本稿では研究対象として江戸語における敬語使用をテーマにして、式亭三馬『浮世風呂』（文化6～9年刊〈1809～1812〉）の実例について話し手の属性との関連から捉えるとともに、その社会的背景について考察する^{*2}。

そもそも敬語とは（広く待遇表現一般を含めて）、話し手と聞き手や話題の人物など、人間関係における一定の配慮、しかも、なるべく良好な関係を保持しようとする配慮に基づいて用いられる。そして、話し手・聞き手の人間関係のあり方や社会状況を如実に反映するものと考えられる。ところで、江戸語のコミュニケーションといえば、落語にも登場するような、気さくな江戸っ子どうしのユーモアを含む軽妙な会話が思い浮かぶ。このようなタイプの会話は『浮世風呂』にも少なからず現れている。しかし、これが江戸語のすべてではない。これとは反対に、敬語を多用し、上品で、折り目正しい、社交的な会話も『浮世風呂』に表れている。このように敬語を多用する丁寧なことばづかいの会話は、話し手・聞き手の間に身分・地位の差がある場合に限らず、同等な者どうしの会話にも現れている。『浮世風呂』の出版された近世後期の江戸は、経済的にも文化的にも大

きな発展を遂げていた。『浮世風呂』における敬語使用もこのような社会背景との関連について考察すべきである。本稿ではこの問題について論じていきたい^{*3}。

2. 敬語使用の類型とその判定基準

敬語とは、話し手における、聞き手や話題主との身分や親疎に関する認識、及び話題や場面などに対する配慮に基づいて用いられる。敬語は本来、身分的上下関係に基づいて用いられたものであるが、現代における敬語使用の基盤は、各人の基本的人格を尊重する考えから、相互尊敬または相互尊重であるべきものとされている^{*4}。このような変化がいつごろから生じたものか考えている。

敬語使用の類型を、ある一人の話し手を基準に大きく4種に分類する。話し手と聞き手が互いに敬語を用い合う場合を「相互尊敬」、話し手だけが敬語を用いる場合を「一方尊敬」、話し手は敬語を用いず聞き手だけが敬語を用いる場合を「一方不尊敬」、互いに敬語を用いない場合を「相互不尊敬」と定義する。話し手が「相互尊敬」の場合には、聞き手も同様に「相互尊敬」となる。「相互尊敬」とは、会話に参加する者が、互いの人格の尊重に基づいて、身分の上下にかかわらず、相互に敬語を用い合うことである。また、話し手が「一方尊敬」である場合は、聞き手からは「一方不尊敬」ということになる。『浮世風呂』にはこの類型がすべて表れている。一方尊敬（及び一方不尊敬）は、主として話し手と聞き手の間に上下関係がある場合に起きるのが通常である。すなわち、敬意の対象となる人物との身分・地位の上下によって敬語を使用するか否かが定まることになる。このため、話し手の敬意がないにもかかわらず、上位者に対して敬語が義務的・形式的に使用されることもある。これと対照的に、相互尊敬は、話し手と聞き手相互の強い待遇意識に基づくもので、その場合に上位者が下位者に対しても敬語を用いることもある。上位者に対して敬語が義務的・形式的に使用される一方尊敬よりも、相互尊敬の方がより積極的な待遇意識に基づくものといえる。

敬語は、歴史的に絶対敬語から相対敬語に変わったといわれる。敬語は本来その絶対的な性格によって、下位者から上位者へ一方尊敬となるのが通常であったと考えられる。しかし、森野宗明によれば、平安時代においても、場面との相関

(特に聞き手に対する顧慮)はもちろん、一種のフェミニズム的傾向、負い目の心理、品格保持のために下位者に敬語を用いたり、その反対に、倫理的批判、感情の起伏などによって上位者にも敬語が用いられなかったりすることがあったという^{*5}。また、源氏物語^{*6}や延慶本平家物語にも相互尊敬の敬語使用が存在する^{*7}。『浮世風呂』の敬語使用も歴史的にはこのような流れを汲むものと見なされる。

筆者は『浮世風呂』をデータベース化しており^{*8}、『浮世風呂』全体における敬語を、男女差、年代差、階層差などの点から数値化することが可能である。相互尊敬などの敬語使用の類型についても数値を基にして判定する。ただし、会話数の少ない話し手・聞き手のペアにおいては、相互尊敬か一方尊敬か判定がつけにくい場合がある。そのために、『浮世風呂』において一定の会話数、すなわち、話し手と聞き手それぞれの会話数が10以上あることを基本条件として、敬語使用の類型を判定する。この基本条件を満たす話し手・聞き手のペアについて、「相互尊敬」とは、話し手と聞き手それぞれの敬語使用率が20%以上あることを目安とし、「一方尊敬」とは話し手の敬語使用率が20%以上あることを目安とし^{*9}、「相互不尊敬」とは、話し手・聞き手それぞれの敬語使用率が20%未満を目安としつつ、いずれの場合でも、話し手・聞き手相互の基本的な姿勢・態度や会話の調子などを加味しながら判定する^{*10}。

3. 『浮世風呂』における話し手の属性と敬語使用の類型

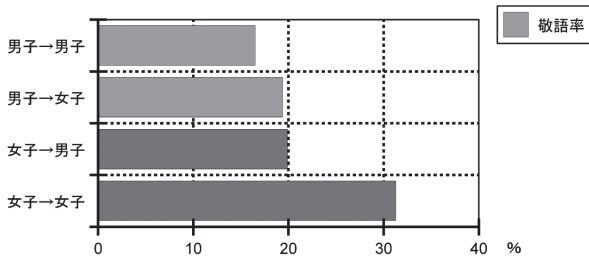
『浮世風呂』において、話し手・聞き手の関係は身分的には同等の場合が多い。話し手と聞き手のペアにおいて身分が明瞭な場合の総数374組のうち、話し手と聞き手が同等の場合は217組(58.0%)、身分差のある場合は157組(42.0%)である。話し手と聞き手とが同等の場合には、相互尊敬の場合と相互不尊敬の場合とがある。詳細は後述するが、相互尊敬になる同等の関係の内訳は、(1)男子よりも女子の会話、(2)年代が高い場合、(3)階層が高い場合に多いという傾向がある。これらは、従来の研究においても指摘されている江戸の敬語使用に関する一般的な傾向でもある。しかし、その原因や社会的背景との関連は十分に明らかにされてはいない。そのためにもこれらの傾向を精査することから始めよう。

4. 敬語使用と性別との関連

『浮世風呂』に登場する話し手について男女別にみると、男子よりも女子の方が敬語使用率が高い。

表1 男女別の敬語使用率

話し手性別	聞き手性別	敬語数	会話数	敬語使用率
男	男	817	4939	16.5%
男	女	58	299	19.4%
女	男	77	386	19.9%
女	女	1500	4794	31.3%

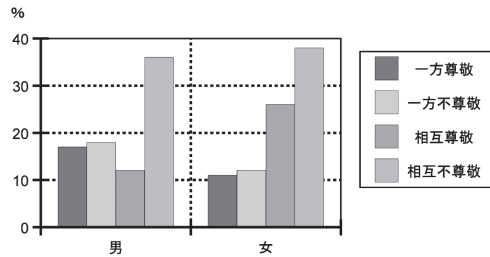


グラフ1 男女別の敬語使用率

話し手の性別ごとに敬語使用種類の例数とその比率は、次の表・グラフのとおりである^{*11}。

表2 男女別の敬語使用類型

性別	一方尊敬	一方不尊敬	相互尊敬	相互不尊敬	相互尊敬率
男	17	18	12	36	14.5%
女	11	12	26	38	29.9%
計	28	30	38	74	22.4%



グラフ 2 男女別の類型

相互尊敬になる比率は、敬語使用一般の傾向と共通して、男子よりも女子の方が高いことが明らかである。この傾向は各年代、各階層においても一貫して認められる。このことは男女の社会的な格差に基づくものではないかと考える見方もあるが、筆者としてはそのように断定することに慎重である。これには理由がある。『浮世風呂』では前編と四編が男湯、二編と三編が女湯になっていて同性間の会話がほとんどで異性間の会話はわずかであるが^{*12}、男女間の会話について敬語使用率を見ると、表1・グラフ1のとおり、男子から女子へ19.4%、女子から男子へ19.9%であって、性別によって敬語使用率に大きな差は見られないことである。しかも、女子どうしの会話の敬語使用率(31.3%)が女子から男子への会話の敬語使用率(19.9%)よりも高い。また、男子から女子の敬語使用率(19.4%)は、男子どうしの会話における敬語使用率(16.5%)よりも高い。このような事情から、女子の敬語使用率が男子よりも高いという理由が当時における男女の社会的格差によるものかどうか、『浮世風呂』における敬語使用の数値からは明らかではない。男女の社会的格差が敬語使用に影響するならば、女子から男子への敬語使用率が女子どうしよりも高くなってよいはずである。むしろ女子どうしの会話で敬語使用が多いことから、その根幹に女子が相互に品格を競い合うような意識が見てとれる。この点については後に詳しく考察する。

5. 敬語使用と年代との関連

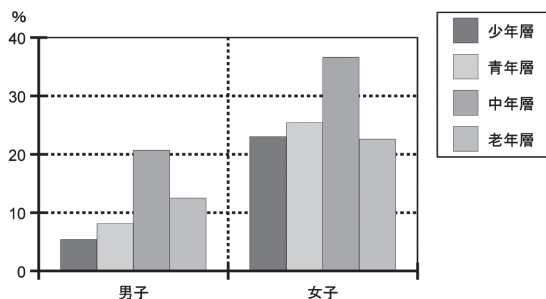
次に、話し手の年代との関連について考えよう。『浮世風呂』では一部の話し

手については、ト書きや本文中において、具体的な年齢やおよその年代を明記している。(年代やその他の特徴に関する記載のある人物については、その内容を、表5以下の表において「話し手注記」の欄に略記する。)このような人物は、男子7人、女子38人、合計45人のみである。これは『浮世風呂』に登場する人物の総数(男子約140人、女子約110人、合計約250人)の2割弱に過ぎず、特に男子において少なすぎる。年代が明記されている人物だけでは、敬語使用の全体的傾向がつかみにくい。しかし、年代が明記されていない人物であっても、話し手・聞き手の関係、話題の内容や話しぶりなどから、およそのところで年代の判別がつく。そこで、少年層(0代・10代)、青年層(20代)、中年層(30代・40代)、老年層(50代以上)と大きくくりにして区分して、男女別に敬語使用の数値を計測すると次の表・グラフのとおりである。(それでも年代を決めがたい人物については「不明」に分類する。また、表中に〈〉で記した数値は年代が明記された人物だけのもの。〈-〉は該当者がいない。)

表3 年代別の敬語使用率

年代	性別	敬語数	会話数	敬語使用率
少年層(10代以下)	男	12〈1〉	223〈41〉	5.4%〈2.4%〉
青年層(20代)	男	116〈3〉	1432〈100〉	8.1%〈3.0%〉
中年層(30～40代)	男	646〈44〉	3119〈506〉	20.7%〈8.7%〉
老年層(50代以上)	男	119〈-〉	949〈-〉	12.5%〈-〉
不明	男	59〈-〉	444〈-〉	13.3%〈-〉
少年層(10代以下)	女	154〈146〉	670〈596〉	23.0%〈24.5%〉
青年層(20代)	女	518〈222〉	2036〈748〉	25.4%〈29.7%〉
中年層(30代～40代)	女	747〈131〉	2042〈457〉	36.6%〈28.7%〉
老年層(50代以上)	女	170〈151〉	752〈621〉	22.6%〈24.3%〉
不明	女	41〈-〉	104〈-〉	39.4%〈-〉

敬語使用率を取り出して、見やすくまとめると次のグラフのとおりである。



グラフ 3 年代別の敬語使用率

男女ともに、中年層の敬語使用率が高いのが目立つ。特に老年層よりも高いことは着目に値する^{*13}。男女別に見ると、男子では、少年層<青年層<老年層<中年層の順で敬語使用率が高くなる。女子では、老年層の敬語使用率が最も低く、次いで少年層<青年層<中年層の順で敬語使用率が高くなる。男女を平均すると、少年層<青年層<老年層<中年層の順で敬語使用率が高くなる。少年層で見ると、男の子どもはあまり敬語を使わないが(5.1%)、女の子どもは比較的に敬語を使っていることになる(23.0%)。男の子どもは元気で活発であるが、女の子どもは成長が早くて大人の敬語使用率に近いのであろう。男女ともに中年層における敬語使用が高い理由について、次のように考える。江戸町人の多くは商人が占めているが、その活動の中心となるのは中年層であろう。商取引の必要上、商人は敬語を用いることが多いことから、その結果ではないかと推測する。これについては後に詳しく考察する。

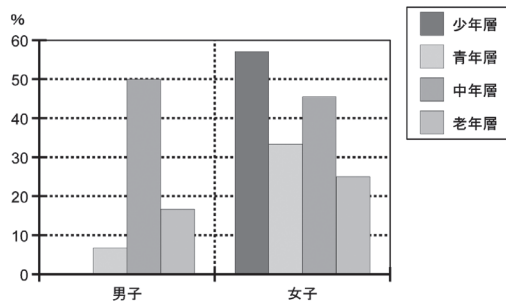
次に、年代ごとの敬語使用の類型は、次の表のとおりである。

表 4 年代別敬語使用の類型

性別	年代	一方尊敬	一方不尊敬	相互尊敬	相互不尊敬	相互尊敬の率
男	少年層	0	1	0	5	0.0%
男	青年層	2	5	1	14	6.7%
男	中年層	12	10	8	8	50.0%

男	老年層	0	2	1	5	16.7%
男	不明	3	0	2	4	33.3%
女	少年層	2	3	4	3	57.1%
女	青年層	5	6	8	16	33.3%
女	中年層	4	3	10	12	45.5%
女	老年層	0	0	2	6	25.0%
女	不明	0	0	2	1	66.7%

相互尊敬の率を性別・年代別にまとめると次のグラフのとおりである。



グラフ 4 年代別敬語使用の類型

相互尊敬の率は男女によって傾向が異なるが、男子では、高い方から中年層＞老年層＞青年層＞少年層の順となり、女子では、少年層＞中年層＞青年層＞老年層の順となる。女子では少年層の相互尊敬の率が57.1%と高いが、これには事情がある。少年層女子における相互尊敬のペアは次の2組である。おはる・おあきという名の、それぞれ六歳ばかりなる娘の子のペア、お丸・お角という名の、それぞれ「こましゃくれた形」(三編上・161-03)をした「としのころ十か十一ばかりの小娘」(同)のペアである。それぞれの敬語使用率を次の表に示す。

表5 女子少年層の相互尊敬

話し手	聞き手	話し手注記	階層	敬語数	会話数	敬語使用率	編巻
おはる	おあき	六歳ばかりなる娘の子	中層	17	32	53.1%	二編上
おあき	おはる	六歳ばかりなる娘の子、 お心よしぐうたらべい	中層	10	13	76.9%	二編上
お丸	お角	十か十一ばかりの小娘	中層	26	75	34.7%	三編上
お角	お丸	十か十一ばかりの小娘	上層	24	76	31.6%	三編上

このうち、おはる・おあきのペアは「となり同士」（「お隣さんごっこ」ともいうべきか）をしている例である。

こちらのふたりはとなり同士をしてゐる。

はる「お隣^{となり}のおかみさん、御免^{ごめん}なさいまし。

あき「ハイ、お出^{いで}なさいまし。コレハ――、マア、こちらへお上^{あが}んなさいまし。

はる「ハイ、これは赤^{あか}の飯^{まんま}でございますが、わざつとお祝^{いは}ひ申す。

あき「ハイ――。御^ご叮^{たい}嚙^{ない}にお拵^{こせ}へなさいましたねへ。

はる「たんとお給^{たべ}なさいまし。

ト帯を前へまはしてあかねもめんで拵^こた枕^{まくら}のさるをせおひこもりうたをうたひながら、

はる「どうも坊^{ぼう}が啼^{なき}虫^{むし}でございますから、迷惑^{まいわく}でございます。ちよつとお山を見せながら小便^{しんい}をやりませう。

（二編上・111-02）

二人とも隣家のおかみさん同士になりきっている。言い方が全体として中年女子のものに類似している。おそらく自分たちの母（おかみさん）が使う社交的なことばづかいをまねしているものと思われる。しかし、無理にまねしようとする余り、案外とんでもない誤りをしている。「御^ご叮^{たい}嚙^{ない}」「迷惑^{まいわく}」の例である。もちろん、当時においても「ごていねい」「めいわく」が正しいことは疑いない。『浮世風呂』の他の箇所においても、「ていねい」「めいわく」と正しく記した例がある。

これは詞^{ことば}づかひにはなはだていねいをつくし、（四編下・274-02）

鬼「〈略〉さりながら冬季になると一倍寒^{ふゆ}いには迷惑^{いちばいさむ}さな。

（鬼角→点兵衛・四編上・245-07）

幕末の資料とはなるが、慶長3年（1867）刊行のヘボン『和英語林集成』初版にも、「TEINEI テイネイ 丁寧」、「MEIWAKU メイワク 迷惑」とある。

それにもかかわらず、子どもたちが「ごたいない」「まいわく」という誤った言い方をしているのはなぜであろうか。江戸語には、アイ（[ai]）>エー（[e:]）という音訛があるが、おそらく、幼い女の子のおはるとおあきは、「ごていねい」「めいわく」までもが音訛の例と勘違いしたようである。あえて正しい言い方をしようとして、「ごたいない」「まいわく」などの誤りが生じたものであろう。これというのも、社交的なことばづかいをしようとして、行き過ぎた結果と考えられる。もちろん、このような言い方が当時一般的であったとは考えにくい。幼児の遊び故のあどけない言い誤りと見なすこともできる。いずれにせよ、この部分の会話は少年女子の通常のことばづかいではないと判断される。

もう1組がお丸・お角のペアで、二人とも習い事に一生懸命励んでおり、ことさら丁寧な言い方をしている。詳しくは次節で述べるが、小松寿雄によれば、お角は上層、お丸はそれよりも少し下と判定されており、ともにお屋敷勤めの準備として習いごとに励んでいるものと見なしている*14。

としのころ十か十一ばかりの小娘、こましやくれた形^{なり}にて二人きもの^きを着ながらはなすをきけは。

お丸「お角さん。此あひだは^{かく}お稽古^{けいこ}がお休^{やすみ}でよいねへ。

お角「ア、おまへもかへ。わたしもね。お稽古^{けいこ}のお休^{やすみ}が何よりも――最^もう――
――い^{いち}ばんよいよ。夫^{それ}だからお正月^{けいこ}の来^きるのがおたのしみだよ。

お丸「ア、ネエ。お正月^{まつ}も松^とが取^とれると不景気^{ふけいき}だねへ。もつと、いつうまでも松^{まつ}をとらずにおけばよいのに、何所^{どこ}の内^{うち}でも直^ちさまお取^{とり}だねへ。否^{いや}だつちやアないよ。

（三編上・161-03）

このことから、少年女子の相互尊敬率の高さ（表4の57.1%）には、子どもの遊びやお屋敷勤め準備に伴う特別な場合が含まれているので、この数字をそのままに受け止めることはできないようである。

したがって、特殊な場合の会話が多い少年層を除外すると、その結果として男女ともに中年層において相互尊敬の率が高いという傾向が顕著である。中年層に

において相互尊敬の率が高くなる理由については後に詳しく考察する。

6. 敬語使用と階層との関連

次に、話し手の階層との関連について考察する。階層の差は、敬語使用に限らず言語使用一般にも大いに関係するので重要である。ただし、階層という概念については厳密な定義は難しいし、階層をどのように客観的に判定するかについても明確な基準が立てにくい。そもそも階層というのは連続的なもので、これを下層、中層、上層など不連続な段階で捉えることについても無理がある。もちろん、『浮世風呂』の登場人物においてそれぞれの階層を明確に示す記載はない。

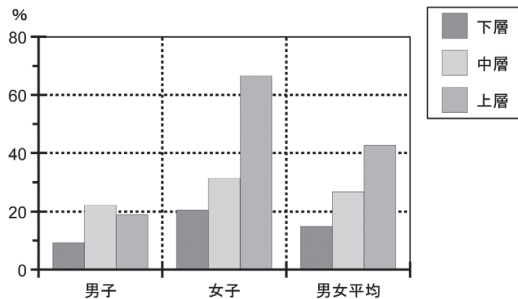
このような困難はあるが、小松寿雄は、『浮世風呂』を中心に町人各層の特色として、ことばづかい、呼称、連母音アイの音訛などを男女別に詳しく記述している^{*15}。氏は、喜田川守貞『守貞謄稿』の記述に基づいて、江戸の町人を、「本町人」「居付町人」などと呼ばれた地主・家持層（「巨戸」とも。家守（大家）層もこれに準ずる）を上層、「地借人」のうちで「表店借」（「中民」とも）を中層、「裏店借」（「小民」とも）を下層と、三段階に類別する^{*16}。そして、上記の基準に基づいて、『浮世風呂』の登場人物約90人について、その階層を一人一人、上層、中層、下層と判定している^{*17}。ただし、すべての登場人物ではなく、『浮世風呂』の割書や本文などにおいて判断の根拠となる記述のある者に限られている。このような階層分けについて、小松は判定の理由をそれぞれ明記しており、筆者としても特に異論はなくて、基本的にその判定結果に従う^{*18}。しかし、判定から漏れている人物も多く、敬語使用の類型を全体的に明らかにしようとするとデータ量が少ない。そこで、小松の判定から漏れている話し手・聞き手についても、その職種・属性に基づく次の基準を立てて判定する。

- ①下男・下女、乳母・子守りなどは原則として下層に分類する。
- ②商店主、おかみさん、などは その店の状況を考慮しつつ中層に分類する。
- ③大店の主人、医師や俳諧師などの教養層は上層に分類する。

以上のように階層を判定して、敬語使用率を測定すると次の表・グラフの通りである。

表6 階層別の敬語使用率

性別	階層	敬語数	会話数	敬語使用率
男	下層	175	1916	9.1%
男	中層	434	1961	22.1%
男	上層	94	497	18.9%
女	下層	431	2112	20.4%
女	中層	804	2571	31.3%
女	上層	353	531	66.5%



グラフ5 階層別の敬語使用率

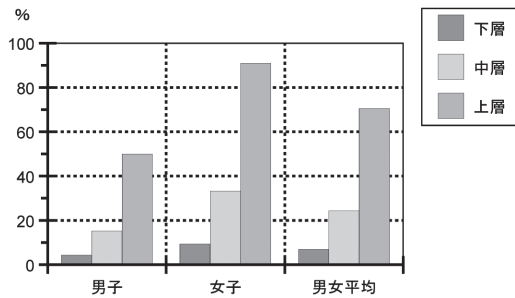
このように、男女ともにおおむね階層が高くなるほど敬語使用率が高くなるという傾向があり、このことは前述の小松寿雄もすでに指摘するところである^{*19}。ここで、男子の上層（18.9%）は中層（22.1%）よりも敬語使用率が若干低くなっていることが少し気にかかるが、男女を平均すると、下層（14.8%）＜中層（26.7%）＜上層（42.7%）の順で敬語使用率が高くなっている。したがって、全体としては階層が上がるほど敬語使用率が高くなると判断して差し支えなからう。

敬語使用の類型でみると、次の表・グラフのとおり、男女ともに明らかに階層が上がるとともに相互尊敬の比率が高まる傾向が顕著である。上述のとおり、『浮

『浮世風呂』において、階層が上がるほど敬語使用率が高くなるので、相互尊敬の比率もこれに関係した傾向といえることができる。

表 7 階層別敬語使用の類型

性別	階層	一方尊敬	一方不尊敬	相互尊敬	相互不尊敬	相互尊敬の率
男	下層	2	4	1	16	4.3%
男	中層	10	5	5	13	15.2%
男	上層	0	3	4	1	50.0%
女	下層	6	6	3	17	9.4%
女	中層	5	4	13	17	33.3%
女	上層	0	1	10	0	90.9%



グラフ 6 階層別敬語使用の類型

相互尊敬率の高くなる、上層に関連する相互尊敬のペアとは、次の表 8・9 のとおり 7 組ある。これらに的を絞って考察しよう。

表 8 相互尊敬のペア（上層男子）

話し手	聞き手	話し手注記	年代	階層	職種・属性	敬語数	会話数	敬語使用率	編巻
たくあん	隠居	医者	中年層	上層	医者	16	65	24.6%	前編上
隠居	たくあん	—	老年層	上層	老人	14	13	107.7%	前編上

表9 相互尊敬のペア（上層女子）

話し手	聞き手	話し手注記	年代	階層	職種・属性	敬語数	会話数	敬語使用率	編巻
いぬ	きぢ	三十くらいの女房	中年層	上層	主婦	68	61	111.5%	二編上
きぢ	いぬ	—	中年層	上層	主婦	84	67	125.4%	二編上
お丸	お角	十か十一ばかりの小娘	少年層	中層	お屋敷準備	26	75	34.7%	三編上
お角	お丸	十か十一ばかりの小娘	少年層	上層	お屋敷準備	24	76	31.6%	三編上
けり子	かも子	物しづかに人がらよき婦人	青年層	上層	国学習い	44	47	93.6%	三編下
かも子	けり子	物しづかに人がらよき婦人	青年層	上層	国学習い	36	42	85.7%	三編下
おさめ	おむす	二十四五のぼったり者	青年層	上層	お屋敷勤め	19	65	29.2%	三編下
おむす	おさめ	お隣の娘御	青年層	上層	お屋敷準備	21	42	50.0%	三編下
お初	おむす	はした女。下女	青年層	下層	お屋敷勤め	80	93	86.0%	三編下
おむす	お初	お隣の娘御	青年層	上層	お屋敷準備	19	47	40.4%	三編下
しうとめ	よめ	七十余りのめくらばあさま	老年層	上層	老女	2	10	20.0%	二編下
よめ	しうとめ	二十四五のよめらしき女	青年層	上層	お屋敷勤め	21	18	116.7%	二編下

上記のペア7組について階層をまとめると、上層12人、中層1人、下層1人となる。中層、下層も1人ずつ混じるが、このうち、中層1人はお屋敷勤めの準備をしている娘お丸、下層1人はお屋敷勤めをしている下女お初で、ともにお屋敷関係者で、上層に準じて丁寧なことばづかいをしている。これらの人物は互いに敬語を用い合って、その結果が相互尊敬になるわけである。

以上のとおり、相互尊敬については、一般的に、女子、中年層、上層において率が高いことが明らかになった。この傾向は敬語使用全般の傾向にも合致するものである。要するに、もともと敬語使用の多い、女子、中年層、上層において相互尊敬の場合も多いということである。なぜこのような傾向となるかについては後に詳しく論ずる。

7. 同等の関係における敬語使用

既述のとおり、『浮世風呂』において登場するのはほとんどが町人であって、銭湯に連れ立って来るのは、家族の他には、同じ地位・境遇の人間どうしの場合が多い。要するに、『浮世風呂』の会話は同等の関係が大半を占めている。『浮世風呂』において、話し手から聞き手への身分関係で集計すると次の表のとおりである。この場合、目上と目下の場合が上下関係にあたる。

表 10 身分関係別敬語使用の類型

話し手から聞き手	一方尊敬	一方不尊敬	相互尊敬	相互不尊敬	相互尊敬の率
同等	11	13	30	62	25.9%
目上	14	3	4	6	14.8%
目下	3	14	4	6	14.8%
計	28	30	38	74	22.4%

『浮世風呂』において相互尊敬と認定できる 38 人 19 組のペアのうち、上表のとおり、上下関係も 8 人 4 組あるが、そのほとんど 30 人 15 組は同等の関係にある。ただし、同等の関係においても相互に敬語使用のないペア（相互不尊敬）も 33 組あって、相互尊敬のペアよりも多い。同等の関係における相互尊敬のペアとは次の表 11・12 のとおりである。（なお、上層に関連する相互尊敬として表 8・9 に掲げたペアを除く。）

表 11 相互尊敬のペア（同等の男子）

話し手	聞き手	話し手注記	年代	階層	職種・属性	敬語数	会話数	敬語使用率	編巻
くりのいち ^{*20}	かきのいち	座頭の坊	不明	特殊	座頭	5	22	22.7%	前編下
かきのいち	くりのいち	座頭の坊	不明	特殊	座頭	6	19	31.6%	前編下
やみ吉	俳助	闇雲屋の吉郎兵衛	中年層	中層	商人	13	17	76.5%	四編下
俳助	やみ吉	詞づかい甚だ丁寧	中年層	中層	商人	98	88	111.4%	四編下
徳蔵	金兵衛	—	中年層	中層	商人か ^{*21}	4	11	36.4%	前編上
金兵衛 [△]	徳蔵	四十余りの男	中年層	中層	商人か	2	11	18.2%	前編上

表 12 相互尊敬のペア（同等の女子）

話し手	聞き手	話し手注記	年代	階層	職種・属性	敬語数	会話数	敬語使用率	編巻
巳	辰	—	中年層	中層	主婦	84	94	89.4%	二編上
辰	巳	お馬の母	中年層	中層	主婦	75	87	86.2%	二編上
おはる	おあき	六歳ばかりなる娘の子	少年層	中層	少女	18	33	54.5%	二編上
おあき	おはる	六歳ばかりなる娘の子、お心よしぐうたらべい	少年層	中層	少女	10	13	76.9%	二編上
お舌	お泥	あくたれと呼ばれたるおしゃべりかみさま	中年層	下層	主婦	8	31	25.8%	二編下
お泥	お舌	おつになる	中年層	下層	主婦	8	17	47.1%	二編下
そばの人 5	そばの人 6	—	不明	中層	—	15	20	75.0%	二編下

そばの人6	そばの人5	－	不明	中層	－	19	19	100.0%	二編下
金溜屋のおかみさん	六十ちかきばあさま	人がらのよきかみさま	中年層	中層	主婦	101	97	104.1%	三編上
六十ちかきばあさま	金溜屋のおかみさん	－	老年層	中層	老女	106	126	84.1%	三編上
おいか	おたこ	そばにあるかみさま	中年層	中層	主婦	33	43	76.7%	三編下
おたこ	おいか	お鮫の母	中年層	中層	主婦	25	32	78.1%	三編下
かうまんなるかみさま	おかさ・おしつ	－	中年層	中層	主婦	6	27	22.2%	二編下
おかさ・おしつ [△]	かうまんなるかみさま	おかさ（鼻くたの中どしま）	青年層	中層	遊女	4	21	19.0%	二編下

なお、表11と表12において△を付した人物の敬語使用率について、敬語使用率は20%以下であるが、会話のペア相互に話しぶりが丁寧なので、相互尊敬の場合と判定する。表12のおかさ・おしつの会話は一つにまとまっているので1人とカウントする。以上、同等関係における相互尊敬の数値を性別と階層との関連で整理すると次の表のとおりである。

表13 同等関係における相互尊敬

性別	話し手階層	聞き手階層	少年層	青年層	中年層	老年層	不明	計
男	中層	中層	0	0	4	0	0	4
男	特殊（座頭）	特殊（座頭）	0	0	0	0	2	2
女	下層	下層	0	0	2	0	0	2
女	下層	上層	0	1	0	0	0	1
女	中層	中層	2	1	6	1	2	12
女	中層	上層	1	0	0	0	0	1
女	上層	下層	0	1	0	0	0	1
女	上層	中層	1	0	0	0	0	1
女	上層	上層	0	4	2	0	0	6
計			4	7	14	1	4	30

話し手と聞き手とで階層の異なる場合もあるが、下層どうし2人、中層どうし16人（女12人、男4人）、上層どうし6人など、ほとんどは同等の階層である。年代でみると、青年層7人、中年層14人が目立っている。

8. 上下関係における敬語使用 1－相互尊敬になる場合

次に、話し手と聞き手とに地位の差のある場合、すなわち上下関係の場合について考察する。上下関係として、専門家と一般人との関係、主人と使用人の間の雇用関係、銭湯の番頭と浴客などの顧客関係、親子関係（嫁・姑を含む）などがある。上下関係の場合には相互尊敬は多くはないが、それでも4組7人のペアがある（以下、上位者に＊を付す）。たくあん＊（医者）・隠居（前編上）、鬼角＊（俳諧師とおぼしき坊主）・とび八（大のひやうきん者）（四編上）、鬼角＊（俳諧師とおぼしき坊主）・点兵衛（商人体の男）（四編上）、しうとめ＊（七十余りのめくらばあさま）・よめ（二十四五のよめらしき女）（二編下）である。大きく、（1）専門家と一般人の関係、（2）嫁・姑の關係に区分する。

（1）専門家と一般人の関係

『浮世風呂』には、医者（たくあん、丹溪）、義太夫の太夫、俳諧師（鬼角）、俳諧うたの詠み手（俳諧亭哥詠）などの専門家が登場する。階層としては上層に分類してある。知識人で専門の技芸にすぐれた人物であると同時に、病気の診察や技芸の教授を介して、一般の人からも一目置かれて丁寧な待遇をされる人物である。専門家の中で、四編上に登場する俳諧師（鬼角）が、大のひやうきん者のとび八（下層）、商人体の点兵衛（中層）と交わす会話がそれぞれ相互尊敬になっている。医者たくあん関連の敬語使用率は表8に示している。鬼角関連の敬語使用率を示すと次の表のとおりである。

表 14 俳諧師鬼角の敬語使用率

話し手	聞き手	話し手注記	性別	階層	敬語数	会話数	敬語使用率
鬼角	とび八	俳諧師とおぼしき坊主	男	上層	3	11	27.3%
とび八	鬼角	大のひやうきん者	男	下層	15	24	62.5%
鬼角	点兵衛	俳諧師とおぼしき坊主	男	上層	19	74	25.7%
点兵衛	鬼角	商人体の男	男	中層	51	82	62.2%

全体として一般人から専門家への会話では敬語使用率が57.1%と高い。ただし、

専門家の方も敬語使用率が下がるものの、25.1%の敬語を用いている。

(2) 嫁・姑の関係

義理の親子という間柄であるが、嫁・姑の関係にあるペアとして、二編下に登場する一組がある。嫁はお屋敷下がりの女で、あそばせことばを用いている。また、しうとめもよめに対して、待遇度の高い対称代名詞「こなた」を用いるなど丁寧なことばづかいをしている。小松も指摘するとおり、上層の嫁、およびその姑といえよう^{*22}。

廿四五のよめらしき女。七十あまりのめくらばあさま、^{しうとめ}姑と見えて、〈略〉
 よめ「〈略〉サアへ、てうど能うございます。おまへさん、^{これ}是をお浴遊してお上りあ
 そばせ。
^{しうとめ}「アイへ。^も最うあがりましたよ。^{けふ}今日は^{こなた}こなたが^{なが}能く^{くれ}流して呉たでさつぱり仕
 ました。
 (二編下・121-07)

敬語使用率でみると、既述の表9に示すとおり、嫁から姑が116.7%、姑から嫁で20.0%であって、嫁の敬語使用率が際だっている。ところが、嫁から下女のおやすや丁稚などの使用人に対しては、会話数が少ないので確定的なことはいえないが、次の表のとおり敬語使用率は低い。(それぞれ18.2%、0.0%)

表 15 嫁から使用人への敬語使用率

話し手	聞き手	敬語数	会話数	敬語使用率
よめ	おやす	2	11	18.2%
よめ	丁稚	0	2	0.0%

この嫁は、上位者の姑には精一杯の敬語を用いるが、下位者の使用人への敬語使用率が低いことから、基本的に上下関係によって敬語を使い分けている。

このように、上下関係のある話し手・聞き手のペアにおいて相互尊敬となる、専門家と一般人との関係、嫁・姑の関係において共通する点は、やはり下位者から上位者への敬語使用率が相当に高く(62.2～116.7%)、上位者から下位者への

敬語使用率は低い（20.0～27.3％）ということである。このように相互尊敬とは認めたものの、敬語使用率の格差が大きいことから、完全に対等な関係の相互尊敬ではなかったといえる。

9. 上下関係における敬語使用 2－相互尊敬にならない場合

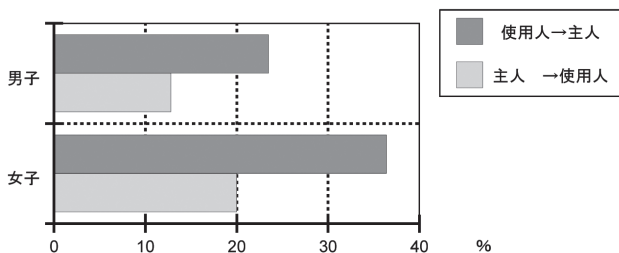
上記の4組を除いて、上下関係のペアにおいては、一方尊敬・一方不尊敬もしくは相互不使用になることが通常である。(1) 雇用関係、(2) 顧客関係、(3) 親子関係（嫁・姑を除く）に区分して考察する。

(1) 雇用関係（主人と使用人）

まず、主人と使用人との間の関係、すなわち雇用関係の敬語使用率については次の表・グラフのとおりである。

表 16 雇用関係の敬語使用率

話し手	聞き手	性別	敬語数	会話数	敬語使用率
使用人	主人	男	4	17	23.5%
主人	使用人	男	5	39	12.8%
使用人	主人	女	4	11	36.4%
主人	使用人	女	3	15	20.0%



グラフ 7 雇用関係の敬語使用率

主人から使用人への敬語使用率が男女平均して 20% 未満（16.4%）、使用人か

ら主人に対する敬語使用率が男女平均して20%以上(25.0%)であって、主人から使用人よりも、使用人から主人に対する敬語使用率が高いので、一方尊敬・一方不尊敬の関係と認められる。女子の主人において敬語使用率が20.0%と基準よりも高いが、この場合の話し手とは上層の嫁と姑(既述)のみであって、ともに丁寧で上品な言い方をしている人物である。該当する話し手が二人のみで、そもそも会話数が少ないことから、使用人に対する敬語使用率が20.0%あっても、相互尊敬と認めることは差し控えることとする。

(2) 顧客関係(商人と顧客)

次に、商人と顧客について、『浮世風呂』では、銭湯経営者(番頭、番頭の妻)と浴客、芸者・幫間と客、銭湯従業員(三助、釜炊きなど)と浴客、青物売りなど行商と客の関係がある。なお、この浴客の中には前編下に登場する生酔いも含まれることになる。生酔いはやや特殊な人物で、武士とも見なされるので^{*23}、除外して計測すると、次の表のとおりである。

表 17 顧客関係の敬語使用率

話し手	聞き手	話し手性別	敬語数	会話数	敬語使用率
商人	顧客	男	217	839	25.9%
顧客	商人	男	66	1001	6.6%
商人	顧客	女	14	37	37.8%
顧客	商人	女	16	128	12.5%

なお、生酔いと番頭たちの間では次の表のとおりである。生酔いの敬語使用率は際だって低い。

表 18 生酔いと番頭たちの間の敬語使用率

話し手	聞き手	敬語数	会話数	敬語使用率
番頭	生酔い	36	70	51.4%
二階の番頭	生酔い	22	45	48.9%
生酔い	番頭	4	206	1.9%
生酔い	二階の番頭	5	112	4.5%

表 17 のとおり、商人から顧客への敬語使用率は、男 25.9%、女 37.8%あり、顧客から商人への敬語使用率（男 6.6%、女 12.5%）よりも 3 倍以上高くなっている。商人から顧客に対しての敬語使用率が高いことについて、商人にとって商品やサービスを購入してもらうためにも顧客には一定の待遇は必要となるので、当然のことと思われる。江戸の町人の多くを占める商人が顧客に対して敬語を使うということは、商人であれば潜在的に敬語使用の能力があることを意味する。町人の存在は江戸語における敬語使用率を高めることと大きな関連性をもっていることになる。この点については後に詳しく論じる。

(3) 親子関係

親子関係といっても、『浮世風呂』に登場する親子は、子どもが幼少の場合がほとんどである。親が幼少の子どもを銭湯に連れてくるという場合である。その場合に、下位者の子どもがほとんど敬語を用いず、むしろ上位者の親が子どもに敬語を用いるという一方尊敬の場合まである。親子間の敬語使用率を集計してみると、次の表のとおりである。

表 19 親子関係の敬語使用率

話し手→聞き手	性別	敬語数	会話数	敬語使用率
子→父	女	0	9	0.0%
子→父	男	0	26	0.0%
子→母	女	8	59	13.6%
子→母	男	0	1	0.0%
子→父母 計		8	95	8.4%
父→子	男	38	212	17.9%
母→子	女	68	252	27.0%
父母→子 計		106	464	22.8%

下位者の子から父母への敬語使用率（8.4%）よりも、上位者の父母から子への敬語使用率（22.8%）の方が高いという結果となる。一般の上下関係とは反対の傾向である。ただし、このような傾向は特殊な場合と見なすことができよう。

具体的なペアごとにまとめると次の表のとおりである。（カッコの内は美化語の数。美化語は必ずしも敬意に基づいて使用されるものではない。）

表 20 子から父母への敬語使用率

話し手	聞き手	話し手注記	階層	敬語数	会話数	敬語使用率	編巻
妹（鶴）	金兵衛	三ツばかりの女の子	中層	0	9	0.0%	前編上
兄	金兵衛	六ツばかりの男の子	中層	0	25	0.0%	前編上
叶屋徳松	叶屋福助	三歳ばかりの小児	上層	0	1	0.0%	四編下
お鮫	おたこ	三歳ばかりの小児	下層	2(2)	20	10.0%	三編下
お馬	辰	八歳ばかりの女の子	中層	6(5)	26	23.1%	二編上
おべそ	お舌	お舌の娘	下層	0	13	0.0%	二編下

子から父母への会話にはほとんど敬語がない。お鮫（三歳ばかりの小児）から母のおたこへ2例の敬語があるが、2例ともに美化語であって、美化語のままに幼児語として用いたものと考えられる。また、お馬（八歳ばかりの女の子）から母の辰へ6例の敬語があるが、このうち5例は美化語、1例は父の伝言にあるものであって、お馬自身の敬語ではない。

この傾向について、三歳ほどの幼児の場合には敬語が使えないという状況を考

慮する必要もあろう。相応の年齢になれば敬語が使えるが、それでも敬語を用いない場合が多い。お馬という八歳ばかりの女の子が母の辰に敬語6例を用いているが、そのうち5例は美化語であり、残り1例は、父の会話の引用部分である。父母から子への敬語使用率は次の表のとおりである。むしろ父母の方が敬語を用いて敬語使用率も高く、やさしい言い方をしている。

表 21 父母から子への敬語使用率

話し手	聞き手	話し手注記	階層	敬語数	会話数	敬語 使用率	編巻
金兵衛	子ども(兄と妹) ^{*24}	四十余りの男	中層	20	153	13.1%	前編上
叶屋福助	叶屋徳松	旦那	上層	18	59	30.5%	四編下
おたこ	お鮫	お鮫の母	中層	44	90	48.9%	三編下
辰	お馬	お馬の母	中層	7	19	36.8%	二編上
お舌	おべそ	あくたれと呼ばれたる おしゃべりかみさま	下層	1	52	1.9%	二編下

以上の表のとおり、お舌という、「あくたれと呼ばれたるおしゃべりかみさま」と注記された母の敬語使用率が1.9%と極端に低いことを除いて、どの親も子に対して敬語使用率が高い。特に、叶屋福助から息子徳松への場合、おたこからお鮫（三歳ばかりの小児）への場合、辰からお馬への場合に顕著である。

親子の関係では、子から親へはさほど敬語を用いず、むしろ親から子に敬語を用いている。なぜこのような傾向が現れるのか、その原因なり社会的背景なりを精密に論証することは難しいが、『浮世風呂』の当時、町人には武士ほど親への孝行を重んじる儒教精神が浸透していなかったのではないか。親の側も子どもを見下すような態度はとらず、むしろ甘やかしているような姿勢が見える。子どもの側からも親に対する甘えがことばづかいにも表れているように思われる。

10. 経済の発展と敬語の有効性

以上述べたとおり、階層が高くなるにつれて敬語使用率も高くなるとともに、相互尊敬の率も高くなる傾向が顕著である。それにしても、なぜ階層が高くなるほど敬語使用率が高くなるのか、その理由を考える必要がある。自明なようにも

思えるが、きちんと論証しようとするのは難しい。たとえば、主人と使用人の関係など上下関係に基づく敬語使用の場合について、上位者となる主人などの方が下位者となる使用人よりも階層が高いことはいうまでもなからう。したがって、階層が高くなるほど社会における地位も高くなり、敬語使用率は下がってもよさそうであるが、既述のとおり実際にはその反対の傾向になる。すなわち、上層の人物の方が敬語使用率が高く、上層どうして相互尊敬の率が高くなるのである。

階層と敬語使用の関係について、筆者は、階層は所得の多少によって規定できるものであり、江戸市民（町人）における商人（商業従事者）の所得と関係づけて考えることができるものと見ている。江戸における経済的・商業的發展に伴って、商人が台頭してきた。『浮世風呂』にも多くの商人もしくは商人とおぼしき人物が登場する。屋号などを明記している人物に限っても、叶屋福助（四編下）、闇雲屋の吉郎兵衛、葉種屋の苦九郎などがいて、女主人としては、筑田屋のおかみさん（二編下）、金溜屋のおかみさん（三編上）などが登場する。商人であることを明記していなくても、商人体の男と注記のある点兵衛（四編上）がいる。いわゆる棒手振りと呼ばれる行商も商人であるし（後に詳述する）、番頭とその妻（二編上）も銭湯経営者といえる。また、商家に関連して、その家族として、かつての主人である隠居（前編上）、道楽息子の衰微（四編中）、前述のお屋敷下がりの嫁（二編下）、料理屋の娘らしきおたい（二編上）などがいる。屋号が明記されているわけではないが、お屋敷勤めを希望して準備をしている、お丸（三編上）、お角（三編上）、おむす（三編下）など、また、三編下に登場する「いにしへぶりの物まなび」けり子、かも子の二人も、裕福な商家の娘ではないかと思われる。

商人は、一般的にどのようなコミュニケーション特性をもっていたのであろうか。私見によれば、商取引の現場においては顧客とのコミュニケーションが重要であり、顧客との友好的な関係を築くことが商業の成功につながる。そのためにも商人にとっては敬語を始め丁寧なことばづかいが不可欠だったと考えられる。結局のところ、江戸における経済發展がコミュニケーションにも大きく影響しているものと考えられる^{*25}。商取引において成功するためのスキルの一つとして

敬語使用があり、その成功者ともいえる上層階級において敬語使用率が高く、相互尊敬の率が高いのであろう。当時のビジネスにおいても敬語が必須のものではなかったかと考えられる。また、階層と敬語使用との関係についても従来と反対の考え方ができる。階層の高さが敬語使用の程度に影響するというよりも、その反対の見方、敬語使用率が高い者ほど経済的な成功を収め、階層も高くなったという考え方である。すなわち、敬語を用いるなど、コミュニケーション力の高い人物が商取引においても成功を収め、結果として所得も向上した（＝階層が高くなった）ということである。

そもそも、商取引は、商品なりサービスなりを買ってくれる顧客があつて成り立つものである。詳しくは後述するが、『浮世風呂』の当時、江戸における経済の中心地で、式亭三馬が薬種業を営んだ日本橋周辺においては、その同業者となる薬種問屋、三井越後屋や白木屋などの呉服問屋、小間物問屋を始めとして数多くの店が立ち並んでいた。商店相互の競争が激しくなるに従って、顧客との良好な人間関係を築くためにも、適切なコミュニケーションの必要性が増したことであろう。商人が顧客に敬語を使って待遇すれば、顧客は一定の待遇を受けたと認識し、不愉快な感情を抱くことはないであろう。商人にとっては、顧客の立場を尊重しつつも、一定の利益を得ることが必要である。顧客に妥協するあまり、価格を下げすぎても利益が出ない。顧客に不快な思いをさせないように留意しながらも、商人側の利益や主張を通す必要がある。このように商人にとって敬語の使用は程よい待遇関係を構築するものとして有効なものとする。

ところで、敬語とは、一般的に、相手や話題の人物に対する敬意を表すものであるが、その反面、距離を置くものでもあつて、少しよそよそしい態度にもつながる。ブラウン＆レヴィンソンの提唱したポライトネス理論からすれば、敬語はネガティブ・ポライトネス（敬避のポライトネス）の表現手段の一つである^{*26}。親密な人間関係においては、かえって敬語使用はマイナスであるし、ごく親しい関係では敬語を用いないのが通常である。ところが、ビジネスにおけるコミュニケーションにおいては、敬語使用に伴う一定の距離感がきわめて有効といえるのではないか。敬語には、他者と適度な距離を保ちつつ、一定の待遇関係を構築す

るはたらきがある。敬語の有するこのような機能を筆者は「人間関係構築機能」と名づけることにする。このような敬語の機能は、人間関係一般のみならず、商業活動において特に有効であろう。すなわち、江戸の社会における人間関係構築機能の必要性から、高度な商業活動を行う上層の町人を中心にして敬語が発達したものであり、その基本的な姿勢は相互に利益を獲得しようとする目的に基づいて相互尊敬を基本とするものではなかったかと考える。商取引を円滑に行うためのコミュニケーション手段として敬語が積極的に用いられたものとする。

11. 青物売りと上方商人との会話

商取引と敬語使用との関係を表す具体例として、『浮世風呂』における行商の青物売り勝兵衛と上方の商人けち兵衛との会話について考察する。現在ではまったく少なくなってしまった行商であるが、江戸時代には日常的に数多くの行商人が江戸市中を回って、さまざまな商品を売り歩いていったという。彼らは、商品を天秤籠に入れて担いで回ったことから、「棒手振り」とも呼ばれていた。江戸末期の随筆、喜田川守貞『守貞謄稿』（嘉永6年<1853>序。巻之六）によれば、鮮魚売り、^{ひもの}枯魚売り、菜蔬売り（八百屋）、豆腐売りを始め、江戸にある行商の種類として約120種が紹介されている^{*27}。『浮世風呂』にも、あさり売り、ひしお売り、菜漬け売り、酒屋、あやめ団子売り、金時売り、豆腐売り、蒲焼き売り、水売り、青物売り、魚売りなどの食品類から、はみがき売りなどの日用品、瀬戸物の焼き接ぎ屋や御用聞きなども登場する。

青物売りと上方商人の会話に戻すと、三馬は次のような注を加えている。

○江戸者の商人は言^えするどく、^{あきうど}上方者の買人は言^{かみ}やさしく聴^{かひ}ゆるゆゑ、^{ことば}物陰より立^{きこ}聴^{ものかげ}ければ、^{うりて}売人と買人と取違^{かひて}さうなり。^{とりちがへ}（四編中・258-05）

青物売りのような江戸者の商人はことばづかいがするどく、上方者けち兵衛のことばづかいはやさしく聞こえるのであって、物陰から立ち聞きすると、どちらが売り手か買い手が分からないという。「言^{ことば}するどく」と評された青物売りの会

話がどのようなものか、一部を抜き出すと次のとおりである。

けち「チト爰に待居てくだんせ。

商人「おかみさんと呼ぶのかネ。

けち「食ぬ^{ちのくは}嘆なら呼ぶ^よ気ぢや。

商人「おきやアがれ。何で待居^{なん}るのだネ。

けち「イヤ、一寸取^{ちよととつ}て来る。

商人「器物^{いれもの}かエ。

けち「イヤへ。

商人「なんだネ。

けち「秤^{はかり}と算盤^{そろ}。(四編中・258-02)

音調が分からないので、青物売りのことばづかいがどれほど鋭いのか判定しにくい、「おきやアがれ」(＝〈冗談は〉やめてくれ、いいかげんにしろ)などは、強い口調で発したものであろう。しかし、二人の商談内容を考えてみると、けち兵衛が江戸商人の常識を超えた値切りを要求するものであり、自分の要望を通すために徹底して粘る。青物売りにとってけち兵衛の要求する法外な値引きには応じられないところに、値引き交渉が長引いて時間を取られることも迷惑きわまらない。とはいえ、結局けち兵衛の粘り強さに折れて、青物売りはしぶしぶ大幅な値引きに応じることになる。

このやりとりを読んでみると、上方商人の粘り強さとコミュニケーションの持ち方は商談においても有効な手段であることが理解される。その反対に、短気なことばづかいの粗い青物売りは損失をこうむったことになる。このようなことばづかいは、青物売りのような小口の商売であればさほどの支障はなかったかもしれない。むしろ、多少乱暴な言い方でも、なじみの顧客と隔てのないコミュニケーションを取れるメリットもあろう。しかし、上層商人の行う巨額の商取引ではそうはいかない。そのような商談を成功させるためにも、上品で柔らかなことばづかいが必須となるであろう。大規模な商取引に携わる上層商人が、事業にふさわしい言い方を獲得しようとして、敬語使用率の高さにつながったと考える。

12. 江戸経済の発展に伴う江戸語の変化

ところで、荒いとされる青物売りのことばづかいであるが、そもそも関東方言そのものの特徴として荒いといわれることが多いし、関東方言を基盤とする江戸語についても、そのように評されることが多い。『浮世風呂』二編上に登場する上方女の江戸語に対する評は手厳しいものがある。

かみ「へい、関東べいが。さいろくをぜへろくと、けたいな詞つきじやなア。お慮外も、おりよげへ。観音さまも、かんのんさま。なんのこつちやろな。〈略〉
かみ「ぞこねへ、じやない。云損じや。ゑらふ聞づらいナ。芝居など見るに、今が最期
だ、観念何たらいふたり、大願成就忝ねへ何の角のいふて、万歳の、才藏のと、
ぎつばな男が云ふてじやが、ひかり人のないさかい、よう済んである〈略〉
かみ「〈略〉扱また関東べいじや。どうしべい、斯しべい、行べい、帰るべいとは、扱
見とうむないナア (二編上・104-16 以下)

『浮世風呂』からは200年以上古く、江戸幕府創立直後の記述ではあるが、キリシタン宣教師・言語研究家のジョアン・ロドリゲスは、その著『日本大文典』(1604～08)の中で、現在の愛知県にあたる三河国以東の方言について次のように述べている*28。当然ながら江戸も三河以東の地域に含まれる。

「三河」から日本の涯にいたるまでの「東」の地方では、一般に物言ひが荒く、鋭くて、多くの音節を呑み込んで発音しない。又これらの地方の人々相互の間でなければ理解されない、この地方独特で粗野な語が沢山ある。

江戸はことばづかいが荒いという評は、和田烏江『異説まちまち』*29にも紹介されている。

寛文のころ、外舅江戸在番より庄内へ帰りて、江戸表繁華のよし咄けるに、右の外曾祖母の云、江戸はさほどに繁昌になりたるや、昔初て大坂より下りたる頃は、よし沼のみ多かりし。〈略〉乱世の後にて、立ながら拔身を持て、坂東声にて応答などしたらんには、畿内の聞なれぬには、喧嘩とも思ひけんかし。大坂にては、その比江戸ものを関東べい、関東ざアといひて笑ひたる」と也。今大都会と成て、物言も華に変じぬ。(巻之一)

著者和田烏江によると、寛文年間（1661～1672年）、外舅の外曾祖母の話として、初めて江戸に下った頃（戦国時代の終わった頃）の江戸語は荒くて、畿内の者にはケンカをしているように思えたと、『浮世風呂』の注と同様の印象が述べられている。ただし、『異説まちまち』の書かれた寛延元年（1748）の時点では、「今大都会と成て、物言も華に变じぬ。」とも記されている。同様のことは太宰春台『独語』^{*30}にも記されている。

江戸の人の風俗こそ、殊に昔にかはりたれ。（略）此のことに限らず、都て男女の風俗、詞づかひ、物の名まで、近比は京に似たること多し。京は公家の外、工匠商估のみなれば、人の心柔儒にて利にかしこく、江戸は武家の都なれば、あづまうどの心粗暴にて利にうとし。然るに三十年この方は、江戸の人、京の風俗をまねぶ故に、武士の心も昔にかはれり。

『独語』一卷は儒学者太宰春台（延宝8年〈1680〉～延享4年〈1747〉）の遺作となる随筆で、著者の晩年の頃に書いたものである。「三十年このかた」は、江戸の人間が京都の風俗を学んだ結果、ことばづかいも京都に似てきたという。「三十年このかた」とは、少なくとも著者の没年〈1747〉から30年以前、すなわち1717年の以前からということになる。

ここで疑問になるのは、なぜ江戸のことばづかいが京都風になったのか、その原因・背景である。春台の見方によれば、京都は公家の他には職人や商人のみで、人心が優しく利に賢いのに対して、江戸は武家の都で、人心が乱暴で利には疎い。この論理からすれば、平和な世の中が続いて、江戸における経済発達の結果、江戸の人間も武士らしさを失って商人のような気質になったということではないか。江戸は、近世になってから急激な発達を遂げた町であることはいうまでもない。総じて上方語の方が丁寧な言い方をするというのも、大坂が天下の台所として経済の中心地であったことに影響されたものであろう。しかし、江戸時代後期になると、江戸の経済が発展し、商人を中心にビジネスにおけるコミュニケーションの必要から、江戸語にも変化が生じたものと推測される。

とはいえ、時代が明治になり、江戸が東京となっても、東京語には「訛り」が

多いという見方をする者がなお存在していた。夏目漱石の弟子の一人で小説『煤煙』などの作者としても有名な森田草平（明治14年〈1881〉～昭和24年〈1949〉）である。その著書^{*31}において次のように述べている。

現今東京語は全国の標準語に成つて居る相だが、又東京語位訛の多い方言は滅多にあるまい。そして、漱石先生は此訛をそつくり其儘作中に使つて居られる。

森田は東京語が標準語となっていることを認識しつつも、東京語ほど「訛り」の多い方言はないといって、漱石作品に現れる多くの「訛り」の実例を挙げている^{*32}。

むろん、上方語と江戸語と比較して、どちらが、やさしい・柔らかいか、鋭い・荒いかなどといっても、当時の音調が不明であるし、そもそも客観的な基準が考えられるわけでもない。森田のいう東京の「訛り」にしても、その判断基準として森田の考える日本語の標準が想定されるが、森田著にはこれに関する明言はない。しかし、式亭三馬やロドリゲスなどの記述から何を根拠に江戸語（東京語）が荒いというのか推測することは可能である。ロドリゲスは、上記の引用部分において、三河以東の方言における「多くの発音を飲み込んでしまう」という音韻の特徴や粗野な俗語の存在を指摘し、森田草平も東京の「訛り」を多数指摘している。要するに、「荒い」という根拠の一つは、発音の訛りや俗語の存在があるものと推測される^{*33}。

いずれにせよ、ことばづかいの「荒さ」はビジネスにおいて用いられるコミュニケーションとしては排除すべきものであったと考えられる。ということは、「荒さ」が排除されていれば、敬語の使用は必須ではなかったのかもしれない。具体的に『浮世風呂』の登場人物についてみると、上方者は案外に敬語使用率が低い。『浮世風呂』において登場する上方出身者に、上方の女（二編上）とけち兵衛（四編中・下）の二人がいる。もちろん、上方出身者であるから、上方語の敬語表現を用いている。その語彙・語法をまとめると次のとおりである。

上方の女

尊敬：なます、おいでて

丁寧：でおます

美化：ご（ご当地）、お（お方）

けち兵衛

尊敬：お（お方）、ご（ご勘弁）、おいで、おおせつけらる、なさる、

お…なされ、んす、さんす、くだんす

謙譲1：てあげる

謙譲2：つかまつる

丁寧：ます

美化：お（お目覚め、お顔、お汁）、ご（ごあいさつ、ご当地、ご無心、
ご了簡物）

二人の敬語使用率を算定すると次の表のとおりである。併せて青物売りと『浮世風呂』における江戸町人全体の敬語使用率を記す。

表 22 上方出身者の敬語使用率

話し手	話し手注記	敬語数	会話数	敬語使用率
上方の女	上方筋の女	9	183	4.9%
けち兵衛	上方下りの男	66	589	11.2%
青物売り	－	17	238	7.1%
江戸町人全体		2468	10520	23.5%

上表からも上方出身者は、江戸市民のことばづかいと比べて、意外にも敬語使用率が相当に低いことが明らかである。上方の女が4.9%、けち兵衛が11.2%である。ちなみに、江戸市民全体の敬語使用率の平均は23.5%で、上方の女やけち兵衛よりも遙かに高い。先ほど述べた青物売りでも7.1%の敬語表現は用いている。

このように、上方出身者の敬語使用率が低いにもかかわらず、既述の三馬注に

もあるとおり、一般的に上方者の物言いは柔らかであるといわれる。江戸語の荒さと対照させて考えれば、上方語における訛りや俗語の少なさに基づくものと考えられる。上方語はそもそも言い方がやさしく聞こえることから、敬語をさほど使わなくても、丁寧に聞こえたのであろう。これに対して江戸者のことばづかい（＝江戸語）は、すでに掲げた例を始めとして、音訛や俗語によって、どうしても荒く聞こえてしまう。このようなことばづかいは、江戸における経済発展とともに不都合になったのであろう。江戸語における敬語の使用はその本来的な荒さを緩和するような意図があったものとする。したがって、商取引の規模の小さい下層商人は別としても、それが大きくなる上層商人ほど敬語を多用する傾向が高くなったものとするのである。その結果、相互尊敬の敬語使用も上層ほど多くなるという傾向が現れたものと考えられる。既述のとおり、男女別では特に女子において敬語使用率や相互尊敬の比率が高いのも、女子も商店経営において顧客への配慮が必要とされただけでなく、男子以上に敬語使用による品格保持の傾向も強くはたらいたのではないかと考える。また、年代別では男女ともに中年層の率が高いのも、他の年代層に比べて中年層が商業活動の中心的役割を担うことが多かったからであろう。

13. 江戸の経済状況と式亭三馬

ところで、式亭三馬自身も戯作者としての活動以外に菓種商を営み、文化7年(1810)12月日本橋本町二丁目「式亭正舗」を開業している^{*34}。江戸の経済状況について、当時の資料を博搜し、数量的な分析によって商人やその活動の実態を実証した注目すべき研究が山室恭子によって行われている^{*35}。山室は、主として田中康雄編『江戸商家・商人名データ総覧』（柊風舎 2010年）に記載された74,000件のデータを基に、江戸の商人たちの結成していた同業者組合のグループ、すなわち「番組」に着目し、番組編成の地域割りの仕方から、全域型（店舗は江戸全域に散在する）、特化型（店舗は営業に便利な特定地域に集中する）、都心型（店舗は日本橋周辺の繁華街に集中する）の3類型に分類している^{*36}。全域型とは、米穀問屋および米屋・^{つきこめ}春米屋・炭薪問屋などを始め生活必需品を扱う

業種で、消費量が多く、重量は重く、付加価値は低めで多様性に乏しく、利益率の小さな商いである。江戸の全域に広く店舗展開し、同業者仲間で番組を編成して担当地域を分割する地域割り営業を特徴とする。特化型とは、札差(浅草蔵前)・人宿(武家地近接)・飛脚屋(東海道筋)など武家との関係が強い業種で、利益率は小さい。番組編成を行い、武家相手の営業に便利な特定地域に立地する。都心型とは、薬種問屋・呉服問屋・小間物問屋などを始め贅沢品を扱う業種で、消費量は少なく、重量は軽く、付加価値は高めで多様性に富み、利益率の大きな商いである。番組編成はなくて、狭い日本橋地区に集中立地し、同業者どうしで烈しく顧客を奪い合う自由競争を特徴とする。

この類型からすると、式亭三馬が営んだ薬種業は都心型に属する商いに分類される。商品購入等の便宜のために江戸市中の商店や飲食店約 2600 を業種別に一覧させた『江戸買物独案内』(文政 7 年 3 月刊)には、「式亭三馬 本町二丁目北側中程」と、三馬の名が掲載され、「江戸の水、薄化粧、金勢丸、天女丸、婦人萬病飲、蘭奢袋、毛はえぐすり、御薬艾」などの商品名が列挙されていて、その営業状況が確認できる^{*37}。薬種商は、江戸の中心、日本橋に集中立地し、薬や化粧品など付加価値の高い商品を扱って、利益率の大きな商いである。そのために、同業者どうしの競争が激しかったようである。しかも、三馬自身も競争の渦中におかれていたといえる。それというのも、三馬は「江戸の水」という製品を開発・販売したところ、人気商品になったという^{*38}。『浮世風呂』の本文中にも出ている。「おしろいのよくのる薬」とは、「江戸の水」のキャッチフレーズである。

(六十近きばあさま)「えんじゆたん わたくし ひいぢゝい じふん なだか くすり略」あの延寿丹は私の曾祖父の時分から名高い薬でございますのさ。あれは一丁目でございますたつけ。私も暑寒にはたべますのさ。

(金溜屋のおかみさん)「ハイ、只今は二丁目の式亭で売ます。

(ばあさま)「エ、何かネ。このごろはやる江戸の水とやら白粉のよくのる薬を出す内でございます。

(おかみさん)「ハイさやうでございます。わたくし私どもの娘なども江戸の水がよいと申て化粧けしやうの度につけますのさ。なる程ネ。ほど顔のかほでき物などもなほりまして、白粉おしろいのうつりが奇麗きれいでございます。

(三編上・166-07)

このように、『浮世風呂』の本文にも、「江戸の水」や式亭正舗で扱う他の商品を宣伝する会話が随所にある。「江戸の水」の効能を宣伝する金溜屋のおかみさんは、既述のとおり、女子の中でも敬語使用率が際だって高い。「金溜屋」という屋号を字義どおりに解釈すれば、ひたすら利益を蓄えて財産を築いた商家ということであり、本来はさほどの店でなかったのであろう。下女たちにも、この女性とは分不相応の話し方をしてしていると批判されている。

ひとから いふふり あ めくちはき あす
人品の能風をして居てとんだ目口乾だの、遊ばせの、入らツしやいのと、たべつけね
ものいひ きと ほうかうにん あつか
へ言語をしてもお里がしれらア。あれだから奉公人が居着ねへはな。

(下女おさる→下女おべか 三編上・170-11)

そうはいうものの、質素儉約による蓄財について、三馬としては好意的に捉えていたことがうかがわれる。『浮世風呂』前編上に、松右衛門という男の話として、伊勢出身商人の質素儉約ぶりが語られている。決して贅沢をせず、自分も奉公人もきわめて粗末な食事で満足して、その結果、一代で多大な資産を蓄えたという。また、四編上に登場する隠居老人晩右衛門も若者たちに無駄遣いを戒めて、金銭を大切に使うことを勧めている。このような登場人物の発言を通じて三馬の金銭観がうかがわれる。

式亭正舗の「江戸の水」に話題を戻そう。その人気が高まると、偽造品まで現れたという。「江戸の水」にあやかろうとしたものに相違ない。『浮世風呂』にもその旨の会話がある。

おいへ「いやだのう気味の悪い。夫よりは三馬が所の江戸の水をつけた方がさつぱりして、薄くも濃くも化粧がはげねへで能。

おかべ「それだから今一面に流行るはな。

おいへ「賈が出来たの。

おかべ「あれは水の色を似せた計で、天花粉を入れたのだツサ。夫だから江戸の水とは付て見て違ふはな。

おいへ「ヲヤ、ほんにか。

(三編下・196-14)

偽造品の登場は、同業者との激しい競争を如実に物語るものともいえよう。三

馬は、上記の例のように、『浮世風呂』本文にも商品名を出すとともに、各巻の末尾にも式亭正舗で販売する商品の広告が数多く載せられている。中田節子によると、式亭三馬は自作の挿絵に「三馬印」を入れるなど、広告製作者としても超一流であったという^{*39}。商品の宣伝活動については、三馬の息子小三馬（本名虎之助）にも引き継がれ、にぎはしきていはんえいすころく販式亭繁栄双六（歌川豊国画 天保13年〈1843〉頃）、こがねたねまきみつまさるはんえいすころく黄金種蔦三馬 繁栄双六（歌川国輝画 弘化4年〈1848〉）など、商品名を栞目にした双六までも製作している。同業者との熾烈な競争を勝ち残るためにも、コミュニケーションの持ち方は重要であったと考えられる。『浮世風呂』に登場する敬語使用率の高い人物は、おそらく日本橋周辺に居住していた上層の商人をイメージした可能性がある。前掲山室著で明らかにされたとおり、日本橋には都心型に類する自由競争の行われた業種が多く経済競争が激しかったことから、商人の敬語使用にも影響していたことがうかがわれる。

おわりに

経済活動における敬語の必要性は江戸時代のみならず現代にも通用するものである。最も敬語が必要とされるのは、おそらくビジネスの場、特に接客や交渉の場においてであろう。現在、敬語に関する指南書などがビジネス書として数多く出版されているが、これは接客に従事する企業関係者からの需要が多いからと見なすことができる。敬語の使用は現代のビジネスにおいてなお重要なものであり、その淵源は『浮世風呂』に表れるような江戸の上層町人を始めとする敬語使用にあったものと考えられる。

- *1 拙著『漱石作品を資料とする談話分析 漱石の文学理論に裏付けられたコミュニケーション類型の考察』（平成24～29年度科学研究費助成事業（基盤研究（C））研究成果報告 2017.4）。

同『漱石を聴く コミュニケーションの視点から』（大空社出版 2019.3）他。

- *2 『浮世風呂』は、次の4編に分けて刊行された。

前編 男湯之巻、上下二冊、文化6年、西村源六・石渡平八発行。

二編 女湯之巻、上下二冊、文化7年、西村源六・石渡利助・石渡平八発行。

三編 女中湯之遺漏、上下二冊、文化9年、西村源六・石渡利助発行。

四編 男湯再編、上中下三冊、文化10年、西村源六・石渡利助発行。

研究の底本としては次を用い、

神保五彌校注『浮世風呂 戯場粋言幕の外 大千世界楽屋探』（新日本古典文学大系岩波書店 1995.7）

次に参考にした。

中村通夫校注『浮世風呂』（日本古典文学大系 岩波書店 1957.9）

用例の引用にあたっては、新日本古典文学大系を底本にして、必要に応じて句読点や話し手などを補い、用例末にはカッコに入れて編・巻・ページ・行を記した。

- *3 『浮世風呂』、もしくは『浮世風呂』を含めて江戸語における敬語や待遇表現に関する研究はすでに数多くある。主要な研究書を掲げると以下のとおりである。

山田正紀『江戸言葉の研究 浮世風呂・浮世床の語法』（普通教育研究会 1936.7）

中村通夫『東京語の性格』（川田書房 1948.11）

湯澤幸吉郎『江戸言葉の研究』（明治書院 1954.4）

『廓言葉の研究』（明治書院 1964.4）

小島俊夫『後期江戸ことばの敬語体系』（笠間書院 1974.9）

松村明『近代の国語－江戸から現代へ』（桜楓社 1977.10）

小松寿雄『江戸時代の国語 江戸語 その形成と階層』（東京堂出版 1985.9）

山崎久之『国語待遇表現体系の研究』（続：上方語編 江戸語編 近世文語編 武蔵野書院 1990.2）

近藤豊勝『江戸遊女語論集』（改訂版 新典社 1996.5）

杉崎夏夫『後期江戸語の待遇表現』（おうふう 2003.9）

辻村 敏樹『「浮世風呂」・「浮世床」の敬語』（早稲田大学国文学会『国文学研究』9-10 1954.3）

また、式亭三馬の伝記や作品については、次を参考にした。

棚橋正博『式亭三馬 江戸の戯作者』（ペリかん社 1994.11）

- *4 現代における敬語使用のあり方として、文部省『これからの敬語』（1952.5）では、「これまでの敬語は、主として上下関係に立って発達してきたが、これからの敬語は、各人の基本的人格を尊重する相互尊敬の上に立たなければならない」とある。また、『敬語の指針』（文化審議会答申 2007.2）にも、「敬語は、人と人との相互尊重の気持ちを基盤とすべきものである」とある。「相互尊重」と「相互尊敬」とは類似する用語であるが、本稿においては、話し手・聞き手の意識に関する概念の「相互尊重」と、敬語使用の類型に関する概念の「相互尊敬」とは区別して考える。

- *5 森野宗明『講座国語史5 敬語史』第3章「古代の敬語Ⅱ」（大修館書店 1971.11）。

- *6 桐壺の巻における、桐壺帝の使いである命婦（上位者）と桐壺更衣の母（下位者）との会話が相互尊敬になっている。

母君もとみにえ物ものたまはず。「いままでとまり侍るがいうきを、かゝる御使の蓬生の露分入給ふにつけてもいとつかしうなん」とて、げにえ耐ふまじく泣いたまふ。（命婦）「「まいりてはいとゞ心ぐるしう、心肝も尽くるやうになん」と内侍の典侍の奏し給しを、物思ふたまへ知らぬ心ちにも、げにこそいと忍びがたう侍けれ」とて、やゝためらひて仰せ事伝へ聞こゆ。（『源氏物語 一』新日本古典文学大系〈底本：大

- 島本〉1993) P.11。
- *7 拙著『延慶本平家物語の日本語史的研究』(勉誠出版 2008.2)。
同「延慶本平家物語における相互尊敬の条件」(『武蔵大学人文学会雑誌』第36巻第3号 2005.1)。
- *8 『浮世風呂』のテキスト(旧大系)を基に、句点または読点で区切られる文字列を単位とし、各単位に含まれる敬語表現の数をカウントする。ひとまとまりの会話において、話し手ごとに、敬語表現の数を分子、単位の数を分母として、「敬語使用率」を算出する。敬語表現は、尊敬語、謙譲語1、謙譲語2、丁寧語、美化語の5種に分類する。
- *9 ここで敬語使用の有無の判定基準として敬語使用率20%以上としたのは次の理由による。ある会話においてまったく敬語表現がない場合はそのまま敬語使用がないと捉えられるが、ごくわずかも敬語使用のある場合には判定に迷う。なぜなら、現実の日本語においては、相手に対する敬意がなくて、ぞんざいな表現を用いている会話においても、わずかながら敬語表現を含むことは起こりうる。したがって、一定基準以上の敬語使用率がある場合に敬語使用があるもの(相互尊敬、一方尊敬)と認め、それ以下の場合は敬語不使用(相互不尊敬、一方不尊敬)と判定する。その判定基準を敬語使用率20%とした。
- *10 なお、『浮世風呂』には、上方、九州、東北、その他の地方出身者が少ないながらも登場し、それぞれの方言を使っている。本稿では江戸出身者の使う江戸語を主たる対象とし、数値の算定などにおいて地方出身者の会話は除外する。
- *11 表中の「性別」「年代」「階層」などについて、特にことわりのない場合は、それぞれ話し手のものである。以下同様。
- *12 『浮世風呂』の銭湯も別浴になっているのは、江戸時代の銭湯は本来混浴であったが、松平定信による寛政の改革以後混浴が禁止されて、少なくとも江戸では別浴が普及していたことによる。しかし、地方では寛政以後も混浴禁止が徹底しなかった。
- *13 このような傾向は現代にも共通する。文化庁の行った平成17年度「国語に関する世論調査」(調査対象は全国16歳以上の男女、有効回答2,107人)によれば、日常生活で、どの程度敬語を使っているかを尋ねたところ、「使っている(計)」は73.9%、「いつも使っている」と「ある程度使っている」の計、「使っていない(計)」は25.9%、「余り使っていない」と「使っていない」の計であり、年齢別に見ると、「使っている(計)」は20代で最も高く、16～19歳と60歳以上で低く、「使っていない(計)」は16～19歳と60歳以上で高いという傾向が見られる。あくまでも自己判断ではあるが、敬語を使うことの多い年齢層は20代から50代ということが明らかになっている。
https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/h17/
- *14 小松注3文献P.200。
- *15 小松注3文献「Ⅲ江戸語の階層」。
- *16 小松注3文献P.12以下。
- *17 小松注3文献P.157以下。
- *18 階層判定の根拠がどこまで厳格かといえば、充分とはいいいくいのものもあるし、またすべての登場人物の階層が判明するわけでもない。また、小松は、「中層ないし下層」などと幅のある判定を行う場合もある。さらに、中層の内部にも上と下という区分を設けて、中層の上、中層の下などという判定もある。いずれにせよ、階層分けを厳密かつ具体的に行うことは相当の困難を伴うものであるし、小松の判定は一つの目安とみなして、参考にする。
- *19 小松注3文献P.157以下。
- *20 くりのいち、かきのうちなどは座頭であるが、階層を定めにくいので、「特殊」に分類した。
- *21 徳蔵と金兵衛の職種について『浮世風呂』の中で明記されていないが、徳蔵は、下女一人を雇っていること、吉原に行ったこと、浄瑠璃の詞を知っていること(浄瑠璃が趣味か)

- などから、中層の商人ではないかと思われる（小松注3文献P.183参考）。金兵衛も徳蔵の仲間であることから同程度の商人と思われる。
- *22 小松注3文献P.196。
- *23 小島俊夫は注3文献P.239以下において、『浮世風呂』前編下に登場する生酔いは、ことばづかいの特徴が武士らしいこと、周囲の人物の並外れた待遇などから武士と見なしている。ただし、武士と断定するだけの決定的な根拠はない。
- *24 金兵衛からの会話は、兄に対するものと、妹（鶴）に対するもの、二人の子ども同時に対するものの3種があり、それぞれの会話数は多くない。金兵衛から子どもたちへの敬語使用率を算出するには一定の会話数がある方がよいので、この表では金兵衛から子どもたちに対する3種の会話における会話数と敬語数をすべて合算して敬語使用率を算定している。
- *25 なお、経済と敬語との関連については井上史雄の一連の研究が着目される。
井上史雄『経済言語学論考－言語・方言・敬語の値打ち－』（明治書院 2011.12）
同「敬語の社会学と経済学」（『特集』敬語研究のフロンティア）明海大学『社会言語科学』11（1）、51-63、2008）他
上記の井上著（2011）では、日本の敬語の方言差を社会経済的發展さらには階層分解と結びつけて説明している。（P.306）
- *26 ペネロピ・ブラウン、ステューヴン・C・レヴィンソン著／斉藤早智子〔ほか〕訳『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』（研究社 2011.9。原著 *Politeness : some universals in language usage* Cambridge University Press 1987）。
宇佐美まゆみ『Discourse politeness in Japanese conversation : some implications for a universal theory of politeness』（ひつじ研究叢書 言語編第26巻 2002）。
滝浦真人『日本の敬語論：ポライトネス理論からの再検討』（大修館書店 2005.6）P.157以下。
同『ポライトネス入門』（研究社 2008.9）P.73 他。
- *27 宇佐美英機校訂『近世風俗志（守貞稿編）（一）』（岩波文庫 1996.5）P.247以下。
- *28 ジョアン・ロドリゲス／土井忠生訳註『日本大文典』（三省堂 昭和30年3月 原題：Arte da lingua de Japam 1604～08）P.612。引用文の日本語訳は土井忠生による。
- *29 『異説まぢまち』全四巻は、関宿藩士であった和田烏江（元禄7年（1694）生まれ）の随筆で、全体の成立年は定かでないが、巻之三は末尾に寛延元年（1748）8月に誌したとある。引用は、『日本随筆大成』第1期17（昭和2年〈1927〉刊行。復刊：日本随筆大成編輯部 吉川弘文館 1976.3）による（P.72）。
- *30 引用は注29の『日本随筆大成』第1期17による（P.284～285）。国立国会図書館デジタルコレクション『春台独語』48コマ（国会図書館蔵文化13年（1816）写本）をも参照した。
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2541835>
- *31 森田草平『文章道と漱石先生』（大正8年〈1919〉 春陽堂）P.164。
- *32 その詳細は次に述べている。
拙著「夏目漱石の小説作品における「訛り」について－森田草平『文章道と漱石先生』を手がかりにして－」（『武蔵大学人文学会雑誌』46-3.4 2015.3）
注1文献（2019.3）
森田が『文章道と漱石先生』において指摘する漱石作品の「訛り」には、「まほしい」「くすばる」「どうれで（道理で）」「へげ折」「おもらひ」「さむしい・さみしい」「せんたく（洗濯）」「はいたつ（配達）」「はらがけ（腹掛）」「しけじけ」「はじ（端）」「やに（嫌に）」などがあるが、これらのうちには当時の辞書類にも掲載されて標準的発音であったと見なされる語も含まれており、森田の言説をすべて妥当とするわけにはいかない。しかし、明治になっても東京語に訛りが多いという見方が存在したことの例となる。
- *33 総じて西日本の人に江戸語は荒いという評価が多いようでもある。江戸語と西日本方言

との相違を意識するからであろう。『浮世風呂』の上方女はもちろん、和田烏江の外舅の外曾祖母は大坂、森田草平は岐阜出身であり、ジョアン・ロドリゲスも主として九州（大分、長崎など）や京都で活動している。

*34 中村注 2 文献「解説」P.16、神保注 2 文献「解説」P.455、他。

*35 山室恭子『大江戸商い白書 数量分析が解き明かす商人の真実』（講談社選書メチエ 2015.7）。

*36 山室注 35 文献 P.70 以下。

*37 国立国会図書館デジタルコレクション「江戸買物独案内 2 巻付 1 巻」下巻 38 コマ。
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/8369321>

*38 中田節子著／林美一監修『広告で見る江戸時代』（角川書店 1999.3）P.79 によれば、「江戸の水」は、偽造品「にせの水」が出るほどの人気商品であり、明治になっても宣伝の引き札が作られるなど健在であったという。

*39 中田注 38 文献 P.77。